

樱花 三

内地編



桜の舞い散る祖国であった。輪郭のぼやけた春の空に、桜が滲んで見えた。その花びらを散らす暖かい風に頬を撫でられて、機から降り立った山崎は首をすくめた。滑走路の向こうに見える、霞とも思える満開の桜に目を細め、久方ぶりの国の空気を味わうように息を吸い込んだ。ここが天国なのかそれとも地獄か、彼には分からない。ラバウルから戻った第二〇六空は、部隊の再編成と共に散り散りとなった。一部は再び前線へ、一部は搭乗員の練成へ、そして新たな飛行技術習得のための過酷な訓練へと別れていったのである。杉本は自身の訓練の後に教育へと回るらしいと、山崎に報告してきた。「隊長の下でずっと戦えると思っていたのに」訓練前に与えられた休暇を利用し、実家に帰る杉本は、荷物を抱えて不満を隠さない。「隊長はどうなったんですか？」「俺は、まだ南へとんぼ返りらしいよ」煙草を燻らせていた山崎は、杉本を宥めるように言った。「俺がまだ生きていたら、またお前を呼んでもらえるようにするよ。それまで元気でいろよ？」力強く頭を撫でられ、杉本はますます頬を膨らます。「織田は一緒なんでしょう？何で俺だけ訓練なのかなあ！織田の面倒は俺じゃないと見られないのに、今更新しいところで大丈夫ですかね」「純矢は俺がいるから大丈夫。文句を言うな、杉本。立派な搭乗員を育てて、連れてきてくれよ」俺が行くまで死なないでくださいよ、と連呼する杉本を追い出すようにして見送った。その名残惜しそうな背を思い出しながら、山崎は再び兵舎へと歩を進める。全ては総司の采配だった。彼は、神谷が純矢に出した命令が恐ろしいのである。二人を会わせないに限ると考えた総司は、純矢を再び南方へと送ることにしたのだった。純矢と一緒に行くことになった山崎は、飛行隊長室で椅子にもたれながら、「純矢が聞いたら怒りそうだな」暗い天井を見上げ、独り言のように呟いた。総司は苦しげに書類を眺めて顔を上げない。「戦地とここなら、戦地の方が安全だ」強く断言する総司に、山崎は何も言わない。神谷をよく知る総司の判断に異論はなかった。激戦地の空よりも神谷と会うことで純矢の未来が危ういのであれば、山崎はあの空に戻ることも厭わなかった。「神谷が陸軍を通してあの子に命令をよこすのが、どうしても俺には納得がいかない。あいつからあの子を俺の養子にと持ちかけて、海軍に入れてくれと言ってきたのに、何を考えているのかさっぱりだ。申し訳ないが、山崎大尉」「構いませんよ。言われるところに行きましょう」南方戦線の維持が難しくなっていることは、純矢もラバウルで体感している。すぐ彼の地へ戻ることに異論はないであろう。「すまん、本当にすまん。……死なないでくれ、二人とも」「戦況のために俺たちは行くんですよ、少佐。それにそう簡単には落されません」そして休暇の余裕も祖国の静寂も感じることなく、その時は再び南の空へと戻ったのであった。しかし、絶え間ない連合軍の攻撃に日本軍が耐え切れなかった。防御できない大空襲と玉砕、結局は再び内地へ戻らざるを得なくなってしまった。彼らは飛ぶ飛行機を一機も持たないからである。「また帰るのでありますか」暗い壕の中に押し込まれてなお、純矢はその余りある戦意を山崎にぶつけてきた。「自分が残ります。陸軍と合流し、この地を死守いたします」「馬鹿を言うな、お前ほどの搭乗員を育てるのに何年かかると思っているんだ！」「整備兵らは置いていくのであります。自分も残ります。飛行機がなくても戦えます」純矢の新しい愛機も、先日の空襲で粉々にされていた。そもそも燃料も満足にないため、遠くまでは飛んでいけない

ことに、純矢はいつも愛機を宥めるように撫でながら、恨めしげに空を見上げていたのだった。

そしてついに、その愛機すらも失ったのである。「自分は空戦よりもたくさん敵を殺せます」轟音に揺れる壕内は狭く暑い。息をすることすら苦痛である暗い空間で、純矢の声は凜と響いた。「だめだ、帰るんだ。内地に飛行機がある限り、俺達は戻るんだ。生きなきゃいけないんだ。それが国のためなんだ！」「ですが」「神谷が待っているんだろう」思わず山崎は口走ってしまった。しかし、純矢が一瞬にして黙ったのは確かだ。そして春の祖国、である。妙な静寂が体を包み、落ち着かない山崎は愛機の向こう側にいる純矢に視線を移した。疲れというものを解さない己の部下に相変わらず表情はなく、自分の機に群がってきた整備兵らに淡々と注文をつけている。愛機の改造が趣味である純矢は、行った先々の基地で整備兵たちと共に油まみれになりながら、零戦をいじりまわしていた。今乗ってきた零戦はまだ手をつけていないために、自分より先にあまり触っては欲しくないようである。山崎は飛行眼鏡の奥でその光景に目を細め、煙草を取り出した。「山崎……大尉ですか？」恐る恐る響く声で呼ばれて顔を上げる。見ると、純矢と同年くらいであろうか、黒目が大きい少年飛行兵が人懐こい笑顔で自分を見ている。「そうだよ」山崎も笑顔で返すと、少年はますます目を輝かせ、「やっぱり！ オールバックの中隊長って言ったら、山崎大尉ですからね」「そうなんだ。俺は俺の知らないところで有名なんだね」ころころとした子犬のようである。足元にすりついて回り、しっぽを振って見上げてくるような少年だった。「だって、中隊のお母さんですもん」「はは……俺は兄貴分のつもりだったけど、お母さんなのか」山崎は照れて頭をかいた。その仕草に沖田も無邪気に笑う。「俺は沖田三飛曹です。飛行隊長の矢島少佐がお待ちです。えっと……織田一飛曹はあの方ですか？」「そうだよ」頷き山崎は煙草を銜える。沖田はくすくすと笑って、「山崎大尉って、俺が思っていた通りの方で嬉しいなあ。まさかお会いできるとは思わなくて」「期待通りでよかった」山崎は、久々の笑顔が作り笑いのようになっていやしないかと不安であったが、沖田の反応を見ると自然に笑えているようである。煙草に火を点けようと航空服のポケットを探したが、マッチが見つからない。零戦の横で、未だ整備兵と話しこんでいる純矢を呼ぼうとして、山崎は吸い込んだ息を途中で放り出した。彼に火を点けてもらうことが癖になっている。沖田は煙草など吸う年齢でもなさそうで、山崎は所在なげになった煙草を銜えている。「山崎大尉、神谷という方はご存知ですか」突然聞きたくもない名前を聞かされ、山崎は危うく煙草を落としそうになった。「男の人ですか」「ああ……うん、男だよ」男、と聞いて沖田は残念そうな顔をする。「織田中佐から神谷って人が来ても、何か寄こしても絶対織田一飛曹に会わせたり渡したりするなってきつく言われているんです。山崎大尉と一緒にいる様に言ってくれって。俺、てっきり女の人か何かかと思っていました」そこによく純矢がやって来た。「お待たせいたしました、隊長殿」山崎は純矢をちらりと見、スカーフに顔を埋める。女に追いかけている方がまだよかったと、銜えたままの煙草を煙草を噛んだ。苦い味が舌に染み、目が覚めていく様である。「貴様、隊長殿に何を言った」何事かを察した純矢は、冷たい視線を沖田に向けた。「嫌だな、邪険にしないで下さいよ」沖田は純矢の殺気など全く気にせず、好奇心に目を輝かせて笑っている。「織田一飛曹ですよ。矢島少佐がお待ちですよ」「俺はそんなのに会いにきたんじゃない」純矢は沖田にそう言い捨てて、山崎に敬礼した。「しばらく休暇と聞いております。自分は神谷大佐殿に連絡を入れてきたくあります」「ちょ、待ってくださいよ、陸軍から織田

一飛曹宛に荷物が届いているんです。矢島少佐が預かっておられるので、一緒に来て下さい」陸軍と聞いて山崎は青ざめ、純矢は足を止めた。咄嗟に山崎は、沖田を隠すようにして純矢の前に立つ。「せっかく休暇だし、久々の横須賀だ。家に帰ろうか、純矢」「帰ってまいりました」「ここのことじゃない、俺の家だ。近いから一緒に行こう。もう何年も帰ってないから、汚いかもしれない。掃除を手伝ってくれるか?」「その前に」「大家のおばあちゃんがいい人でね。そうだなあ、何か買っていくか。土産も何も無いのも悪いしなあ」必死に話を逸らそうとする山崎に加勢するようにして、沖田も嬉しそうに山崎の後ろから顔を出す。何かを聞いたそうにして、純矢の様子を伺う沖田の目は澄んだ光を含んでいた。山崎は沖田のその目を見ながら、百合子を思い出していた。彼女も見合いの時に、純矢が隠さずに放つ、外の人間に対する警戒をものともせず、その間合いに軽々と入り込んできたものだった。好奇心とまっさらな心を持つ者だけが、純矢を色眼鏡で見ないのであろう。「織田一飛曹のことも、俺知っているんですよ。皆が、弾丸のような刀のような搭乗員だって言っていたんです。ずっと俺の憧れでした」純矢の冷めた眼差しは変わらずに沖田を観察している。彼には何を言われているのか、理解ができていないのだ。桜の花びらが、彼らの足元をさらさらと転がっていく。普段であれば通訳に回る山崎が、沖田の言動に興味を示さないでいた。心ここにあらずといった風にして、彼は武骨な戦闘機乗りには似合わない細い指で煙草を挟むと、「純矢」「はい」「火をもらえるか」陸軍からの荷物はいつ届いたのであろう。神谷は何を送ってよこしたのだろうか。不安がこびりつき心に影を宿す。純矢が見たことがないと言っていた桜が滑走路を取り囲み咲き乱れていた。あれほど見せてやりたかった桜が、純矢を取りこんでしまいそうで、山崎は息を押し殺している。その純矢は桜の存在に気を払うこともなく、山崎に火を差し出した。煙草の火口を確認し、彼は靴の踵を鳴らして姿勢を正した。「山崎隊長殿」「何だ?」「自分は先に荷物を取りに行きたいです」そして今度は、沖田を睨みつけて言い放つ。「貴様、矢島少佐殿のところに案内しろ」山崎の抵抗も虚しく、二人は沖田に案内されて飛行隊長室に入った。窓際の机に、体の大きな男が煙草を灰皿に乗せたまま、堂々たる姿勢で座っている。前回帰ってきた時にはいなかった男だった。今まで飛行隊長といえば、春の日差しを思わせるような柔らかい笑みを絶やさない総司であったし、総司の次も紳士然とした海軍士官であったから、逞しい作りの上官を見るのは久しぶりで、山崎は思わず笑いそうになるのをこらえる。立派な口髭を蓄えた彼は色黒で腕も首も太く、零戦に乗るには少し窮屈そうな体をしていた。「山崎大尉と織田一飛曹をお連れしました。俺はここで失礼します」沖田は飛行隊長の前ではさすがに委縮し、手短かに報告して部屋を辞した。矢島は芋虫のような太い指で煙草をもみ消し、山崎の後ろにいる純矢を睨む。「織田純矢というのは貴様か」野太い声で問われても返答をしない純矢を、矢島は舐めるような視線で見ている。純矢には噂があった。弾丸のように敵を追い、撃ち落す搭乗員――その顔に何も浮かべず敵を執拗に追い殺す男――腰には陸軍の日本刀を差し、柄には白布を巻いている。血で濡れても滑らないための処置であるが、海軍ではまず必要のないことだった。そして、直立不動のまま微動だにしない。矢島は煙を神経質そうに細く吐き出して、机の上に大きな鞆と包みを置いた。「この荷物を貴様に渡すよう、前任から引き継いだ。どうやら貴様が一度横須賀に帰ってきた時に届いていたらしいが……それからこの手紙」純矢は無言でそれらを受け取った。荒い布の包み

は枯れ草のような色をしている。細く長いそれは、忙しくぐもった金属音をさせて純矢の腕に抱かれた。「何が入っているんだ」矢島は不審げに聞くが、純矢は開ける素振りもない。「純矢、重たくないか」山崎が尋ねても、純矢は大事そうにそれを抱えたまま無言であった。「まあいい。ゆっくり休め。ご苦労だった。今後のことは後ほど連絡を入れる。何かあったら沖田に聞いてくれ。貴様らが来ると聞いて、ずっと楽しみにしていたようだから」矢島は手元の名簿に視線を落した。紙の上に目を泳がせながら、「織田一飛曹は……なんだ、近くか、家は。山崎大尉……もか？ ああ、実家は東京か」「はい。ですが、こちらに下宿を借りておりますので、連絡はそちらにお願いします」「何だ、帰らんのか？ 家に帰って親孝行でもしてこいよ」山崎は肩をすくめる。ふと見ると、純矢が自分を見上げていた。何一つやましいことなどないのであるが、純矢が向ける真っすぐな瞳は時折山崎を後ろめたい気持ちにさせた。「はあ、まあ次の機会に」言葉を濁し、山崎は純矢を引っ張るようにして飛行隊長室を後にした。廊下では沖田が待っていた。二人が出てくるのを見ると、沖田は目を輝かせて走り寄ってきた。「少し休まれるでしょう？ 部屋はこちらです」出張者用の部屋がある、と沖田は飛行隊長室近くの部屋を指さす。「大丈夫、俺が昨日掃除しておきました」「ありがとう」山崎が礼を言い終わらぬうちに、純矢はすぐさま部屋に入り、室内の机に受け取った荷物を置いた。山崎の後から沖田が来るのを見ると、彼は不機嫌そうに眉根を寄せる。「貴様は出ていけ」「どうしてですか？」純矢にとって、沖田は完全に部外者だった。舞い戻った南方でも、杉本たちのいない部隊で純矢は一人であることが多かった。人見知りをするのではなく、彼の知らないものは常に灰色の存在であり、灰色のものと会話をする必要は彼にはなかったのだった。しかし沖田はそんな気配に気がつかず、純矢を覗きこむ。「一飛曹って、右目は見えていますか？」唐突な質問に不意を突かれた純矢の目が凍りつき、沖田を凝視する。「その傷痕からして、かなり深いものではないか？ 噂では片目の撃墜王なのですけど、本当かなあって」「だったら何だというんだ」「なあ、純矢。火はあるか？」山崎は、彼にしか気がつかない動揺に喘ぐ純矢に、助け舟を出してやった。目の話を純矢はしたがらない。誰かと目を合わせることも滅多にない。杉本たちならば、その辺りは承知していて傷の話などはしなかったが、もう彼らはそばにはいないのだ。「沖田、煙缶あるかな」「あります、取ってきます」沖田が出ていくと、部屋は静かになった。純矢もいつもの無表情を取り戻して鞆を開ける。山崎はその中身を見て、激しく殴られたような衝撃を覚えて目を閉じた。神谷の意思が胸に突き刺さり、肺腑を駆け巡るかのようである。それは、真新しい陸軍の軍服と長靴であった。腕の部分には日の丸と菊のご紋が縫い付けてあり、普段見る陸軍の制服とは明らかに形が違った。詰襟も日の丸も、鮮血を滴らせたばかりのような赤い色をしていた。純矢も驚いたらしい。それを机上に広げて戸惑ったように眺めている。「防弾が以前と違う」上着を撫でながら、純矢は呟いた。「何が入っているのか」「服に防弾板が入っているのです」「防弾板？」「自分の任務は一番先に敵陣に突入し、相手を混乱させ、本隊の攻撃を成功させることにありますので、たとえ敵に狙撃されようとも、作戦に支障のないようにしてあるのであります」山崎は虚ろに純矢の軍服の日の丸を眺めながら、生身の人間をこうまでに――防弾板とて完全ではない、当たれば貫通せずとも衝撃に息ができなくなるし、骨も無事ではすまないであろうが、純矢がそれを着ていれば――撃たれても何事もないように思えてしまうのだ。彼が物として見えてしまうのなら、いっそ撃たれても修理ができればいいなどと、山崎

は無感動な心の中で考えている。。 純矢は軍服を畳んでしまうと、包みを広げた。「新型だ」今度は嬉しそうに中身に触れる。 黒光りする美しい小銃であった。純矢の軍服と同じく、銃身に菊のご紋が刻まれている。そこを包み込むようにして握り敵を狙うのだ。「連射ができるのか」純矢は独り言のように呟いて、おもちゃを楽しむ子供のように、それを天井にかざした。

「お前、機械が好きだよなあ」煙草を吸いながら山崎は目を細める。寝顔以外で純矢の歳相応の顔というのは、青空に美しい弧を描いた虹がかかると同じくらい貴重であった。戦地では、陸軍軍人を彷彿とさせる自信に満ちた態度と、敵機を蹴散らす不死身の零戦搭乗員という姿に、思わず忘れがちであったが、彼はまだ酒も飲めぬ、女も知らぬ少年である。本来なら、あの子犬のような沖田と同じくらい無邪気であってもいいのだ。 そんな大事な表情を、純矢は崩すことなく山崎に向ける。「はい、自分もこのようになりたいがあります」その憧れはともかくとして、幼い顔に山崎は安堵を覚えた。しかしそんな安息も束の間、荷物の中に入っていた手紙を開くなり、純矢の顔に影が落ちる。山崎は短くなった煙草を持て余しながら、「どうかしたのか?」「大佐殿の家に行かねばなりません」山崎が思わず手紙を奪うようにして取ると、日付と住所だけが黄ばんだ紙に書かれていた。「お前、神谷の家を知っているのか」「このような紙に書く場所は、それしか考えられないのであります」純矢は手早く陸軍の軍服に着替え始める。見る間に海軍航空隊搭乗員は立ち去って、陸軍の青年将校がその姿を現した。 軍服は彼の体に丁度よく馴染んでいる。成長し伸びた腕にも背丈にも、それはまるで採寸して仕立てたかのように調和していた。「お前、何でそんな服を着るんだ!」「この場所に行きたくあります」「いきなり行っても、神谷はいないかもしれないぞ」「待たせていただくまでであります」「そんな慌てることもないだろう。休みはこれからだ。とりあえずいったん俺の家に行こう」そこに、沖田が軽快に鼻歌を歌いながら煙缶を持ってやって入ってきた。とたんに純矢の顔から感情が消える。それに気が付いた沖田は、屈託のない笑顔で、「もう、織田一飛曹ったら、俺のこと嫌わないで下さいよ」沖田は机の上の小銃を見た。彼がすごい銃だ、とため息をついても、純矢は鏡のように磨かれた長靴に足を入れながら、顔も上げず返事もしない。「織田一飛曹、どうして陸軍の格好なんかしているんですか?もしかしてご親戚に陸軍の方がいらっしゃるとか。ああ、だからなんですね」沖田は一人で話し、一人で頷いた。「矢島少佐のお兄さんって陸軍の軍人さんなんだそうですねよ」純矢が表情を変えないのと同じ、沖田は笑顔を絶やさないでいる。「それで、お兄さんのお知り合いの方から、織田一飛曹が内地に戻るのだったら、横須賀に戻せって頼まれていたそうで」純矢は手を止め、沖田を見た。「それでなんだ」「ええ、それで戻ったら連絡を入れて欲しいと言われておりまして、先日連絡を入れておいたんですけど、さっき返答がきまして、俺が伝えておく様に言われたんです」着替え終え純矢は立ち上がる。陸軍の所有物となった彼は、ますます冷めた目で沖田を見据えた。腰に刀を吊るして立つ様は、神谷の複製のようであった。

「とっとと結論を言え」山崎には止められない。ラバウルでの戦況ですら、神谷の手の内なのかと思われるくらいに、純矢は内地に引き寄せられているのだ。神谷はどうあっても純矢に会う気であるようであった。組織を使うその強い意志を阻むには、個人はあまりに非力である。 山崎の虚ろな心境とは裏腹に、沖田は子供らしい笑顔で言った。「命令違反である、罰として総司の家に帰り、軍の有り難さを思い知れ——だそうですが、どういう意味なんでしょうね」